

希少生物の野生復帰を生かした環境学習の研究

ENVIRONMENT EDUCATION APPLYING THE POLICIES OF PROTECTING AN ENDANGERED SPECIES

○小障子まみ¹ Mami KOSHOJI

田中亜依² Ai TANAKA

寺井 友哉³ Tomoya TERAJ

岸野 麻衣子⁴ Maiko KISHINO

関家 昌志⁵ Masashi SEKIYA

萬田 剛史⁶ Tsuyoshi MANDA

These days, people began to pay attention to the policies of protecting an endangered species. Such policies have a good effect on each area, so it might lead to the community policy. In Toyooka city, some policies of protecting write storks have a good result. They not only help white stork to return to the wild, but also develop the product about white stork and accept the tourism and so on. In this research, I concentrate on the environmental education, and consider in order to apply for it in other areas which cope with protecting an endangered species. ENVIRONMENTAL EDUCATION APPLYING THE POLICIES OF PROTECTING AN ENDANGERED SPECIES was analyzed on following 3 aspects.

1. Analyze the literatures referred to environmental education
2. Internet research: collect the example of environment education in other areas.
3. Hearing survey: visit Toyooka City Office and interview a board of education and white stork-symbiosis section about environment education in Toyooka city.

Keywords: *Protection of environment, Environmental education, Community Relationship, Community Policy, An endangered species*

環境保護、環境学習、地域連携、地域政策、絶滅危惧種

¹関西学院大学 総合政策学部

²同上

³同上

⁴関西学院大学大学院 総合政策研究科

⁵同上

⁶同上

目次

第1章 はじめに

- 1-1. 研究の背景
- 1-2. 研究の目的
- 1-3. 研究の方法

第2章 環境学習とは

- 2-1. 環境学習の定義
- 2-2. 環境学習の現状
- 2-3. 環境学習の意義
- 2-4. 環境学習の変遷と課題
- 2-5. 環境学習の具体例

第3章 兵庫県におけるコウノトリの野生復帰政策

- 3-1. 豊岡市の概要
- 3-2. コウノトリの絶滅と保護の歴史
- 3-3. 具体的な野生復帰政策

第4章 豊岡市の環境学習

- 4-1. ヒアリング調査
- 4-2. 豊岡市の取り組み
- 4-3. 環境学習の具体例
- 4-4. 環境学習の連携
- 4-5. 環境学習の効果と課題

第5章 希少生物の野生復帰を生かした環境学習の展開

- 5-1. 環境学習によって地域にもたらされる効果とは
- 5-2. 今後の環境学習

第1章 はじめに

1-1. 研究の背景

コウノトリは絶滅の危機にさらされていた。しかし、豊岡市をはじめとした野生復帰政策の結果、現在では「豊岡発」のコウノトリの姿が全国各地で見られるようになった。近年、絶滅危惧種の保護政策が注目されていることから、豊岡市におけるコウノトリの野生復帰政策に着目し、それらがさまざまな波及効果をもたらし、それが豊岡だけでなく、全国の同様の地域での政策につながるのではないかと考えた。

1-2. 研究の目的

環境学習の観点から、コウノトリの野生復帰が地域にもたらした影響を考察し、他の希少生物の野生復帰政策に取り組む地域での環境学習に生かしていけるかを提案する。

1-3. 研究の方法

- 文献・インターネットのデータ比較・分析
- ヒアリング調査（2008年10月20日）を基にした分析

第2章 環境学習とは

2-1. 環境学習の定義

環境教育とは、『環境や環境問題に関心・知識をもち、人間活動と環境とのかかわりについて総合的な認識と理解の上にならって、環境保全に配慮した望ましい働き掛けのできる技能や思考力、判断力をつけ、より良い環境の創造活動に主体的に参加し環境への責任のある態度を育成する』ことと考えることができる（文部科学省『環境教育指導資料』（1991）より）。環境学習は、環境教育の範疇において行われるため、内容はほとんど同じである。

環境学習は、「関心の提起→理解の進化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促し、問題解決に向けた成果を目指すという一連の流れの中に位置づけるものである。また、知識や理解を行動に結びつけるため、自然や暮らしの中での体験活動や実践体験を環境教育の中心に位置づけることや子どもにとっては遊びを通じて学ぶという観点が大切である。環境学習が行われるあらゆる場において、体系的かつ総合的な環境教育を着実に進めることが可能となるような効果的な仕組みを構築する必要がある。

2-2. 環境学習の現状

環境学習は、今日の環境問題が世界的に大きな問題となっていることや、人々の日常生活と密接な関連を持つ都市・生活型環境問題が大きな広がりを見せていることなどから、その内容、頻度共に、より充実させることが求められている。こうした環境問題を解決していくためには、一人ひとりが人と環境との関わりについて理解を深め、望ましい環境の形成に向けて行動するための学習機会を広げることが、社会的に重要となっている。

しかし、未だに環境学習の機会が十分であるとはいえない。以下は、日本における環境学習の実施状況である。

- 日本における環境学習の実施状況
 - 実施都道府県数・・・49
 - 市町村数（対市町村数）・・・351（67.3%）
 - 開設学級、講座等数（対全学級、講座等数）・・・730（20.5%）

（出典：文部省調べ）

また、環境学習に対する意識調査をしたところ、次のようになった。

- 環境学習に対する意識

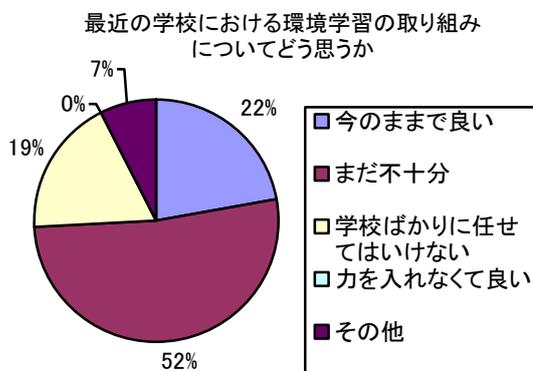


図1 環境学習への意識調査

環境学習がまだ十分でないと感じた人は、過半数を超え、環境学習のより一層の充実が求められていることがわかる。また、学校ばかりに任せたいいけないと感じた人も約20%いることから、学校だけでなく、地域や行政とも一体となった環境学習が必要となっている。

2-3. 環境学習の意義

環境学習の目的は、環境問題に関心を持ち、環境に対する人間の責任と役割を理解し、環境保全に参加する態度及び環境問題解決のための能力を育成することである。環境学習の視点は主に「環境の中で学ぶ (in)」、「環境について学ぶ (about)」、「環境のために学ぶ (for)」の3つに分けられる。

実際に豊かな自然や身近な社会の中で、自然体験、社会体験等の直接体験や、調査、実験等の具体的な活動を通して、五感を通して環境を実感し、豊かな感受性を養うと共に、環境に対する関心を深めることができる。

次に、環境や自然と人間と関わりや環境問題と社会経済システムの在り方及び生活様式との関わりについての理解を深めることで、適切かつ正確で、総合的な認識を形成することができ、環境について主体的に学び、自分なりの考えが持てるようになる。

以上の過程を経て、環境保全やより良い環境の創造のための態度や行動を身につけることが狙いである。体験や理解を深めることで、確かな認識と価値判断に基づく自主的で実践的な行動ができる子どもの育成まで発展させることが環境学習の本来的な意義である。

2-4. 環境学習の変遷と課題

元々、日本における環境学習は、1970年代に入って始まった。高度経済成長によって、公害問題が広まり、環境保全への意識が高まったからだ。1980年代後半には、地球温暖化や酸性雨、オゾン層の破壊といった地球規模の環境問題が顕在化してきた。人々の日常生活と密接な関連をもつ都市・生活型環境問題が広がったことから、一人ひとりが環境とのかかわりについて理解を深め、行動するための学習機会が必要とされ、環境学習への関心が高まった。それと相まって、日本での環境学習の取り組みが活発化した。

今日では、人口、開発、貧困、食糧、民主主義、人権や平和などの問題と切り離すことができないため、持続的な社会をどうつくっていくか、という視点で、「環境のための学習」という枠から、「持続可能な社会の実現のための教育・学習」にまで範囲を広げることが求められている。

一方で、環境学習は、体系的な指導方法や評価方法が確立されていないため、環境学習を行う体制そのものが整っていないのが現状である。また、教師自身が子どもたちに対して環境学習を行えるだけの知識や技術を十分に持っていないという問題もある。

社会においても、環境学習の必要性はあまり浸透していない。受験のための教育を望む多くの親の価値観や、環境を大切にする心よりも効率や生産性を

上げることに優れた人間が重宝される社会の仕組みが、環境学習の推進を妨げる一因となっている。

2-5. 環境学習の具体例

以下は、全国の環境学習の実施例である。ほんの一部ではあるが、それぞれに特徴が見られた。これらの具体例を分析して、豊岡市での環境学習との比較と考察を行う。

表1 全国の環境学習の実施例

学校名	内容	考察
静岡県湖西市 立東小学校	全校児童・PTA を対象に、『ふるさと学習』において、身近な水生生物を自然回帰・生息させ、学校ビオトープをつくる。	児童以外に PTA も含めた学習を行っているのが評価できる。加えて地域の住民も参加するとより地域の連携が強まる。
新潟県豊栄市 立句葛塚小学校	小4 児童を対象に、地域のゴミと水について調査し、環境への影響を理解、問題解決のために活動する。	暮らしと深く結びついた実践的な授業を行っている。また、社会科という科目と関連させて学習しているので、環境学習への積極性が感じられる。
栃木県宇都宮市 立東小学校	「タウンウォッチング」で課題の素材を集め、その課題について学習する。 例えば、騒音計で測定ポイントの騒音を調べ、前年の記録と比較する。	自分で課題を探して取り組むというのは、独自性がある。子どもも自分の興味に沿って学習できるので、モチベーションが上がる。

それぞれの環境学習の形態は様々である。しかし、地域の連携によって学習が行われている例はあまり多くない。多くの学校では、子どもと先生、PTA といった学校に関係する人のみで行っている。地域の環境について学ぶ場合、地域に根付いた住民の方がよりその土地について深い知識を持っているはずである。地域住民も含めて学習を行うことで、より専門的で実践的な学習が可能となる。また、地域との結びつきも深まる。近年、人間関係が希薄になる中、学校、地域含めた学習を行うことで、地域の一体感も生まれ、世代を超えた連帯感を得ることができる。

次に、豊岡市のように地域独自の環境資源を生かした環境学習があまり行われていない。ビオトープ作りも効果的ではあるが、さらに既存の自然にも目を向けることはできないだろうか。地域資源を生かした学習を行うことで、地域について理解を深めることができる上に、郷土に対する好感も持てる。地域に関心を持つ者が増え、地域の活性化にもつながるのだ。

第3章 兵庫県におけるコウノトリの野生復帰政策

3-1. 豊岡市の概要



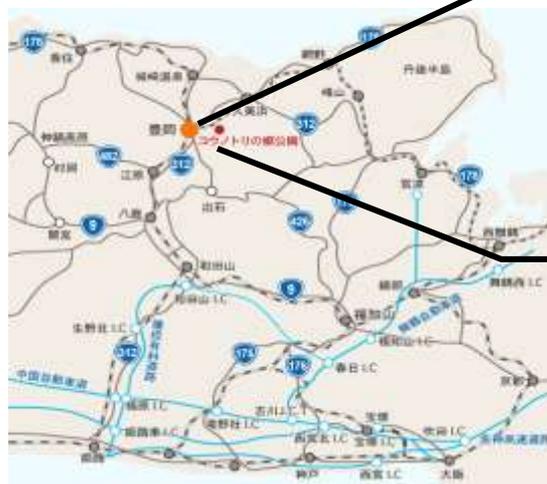
豊岡市は兵庫県の北東部に位置し、人口約9万人の都市である。2005（平成17）年に、1市5町（豊岡市、城崎町、竹野町、日高町、出石町、但東町と対等合併して豊岡市となった。

市域の約8割を森林が占め、北は日本海、東は京都府に接し、中央部には円山川が悠々と流れている。海岸部は山陰海岸国立公園、山岳部は氷ノ山後山那岐山国定公園に指定され、多彩な四季を織りなす自然環境に恵まれたまちである。

産業は、農林水産業、観光業などが盛んである。特に観光業では、全国的に有名な城崎温泉をはじめ、神鍋スキー場、但馬の小京都・出石城下町などを有し、年間の観光客は500万人以上にのぼっている。また、地場産業としては、全国の4大産地の一つである、かばんや出石焼などの生産が行われている。

平成17年9月には、国指定の特別天然記念物・コウノトリが自然放鳥され、人里で野生復帰を目指す取り組みが始まった。コウノトリは旧豊岡市の市鳥・兵庫県の県鳥となり、現在では、まちの至るところにコウノトリのシンボルが見られる。

また、市内には、多くのコウノトリ関連施設が建てられている。



1999年開館
コウノトリの郷公園
コウノトリ本舗

2000年開館
コウノトリ文化館

- コウノトリの郷公園・・・コウノトリの保護と増殖、野生復帰に取り組む拠点施設。広大な敷地の園内に、コウノトリの生態が観察できる公開ゲージなどがある。
- コウノトリ文化館・・・郷公園の中にあつて、住民の視点に立った「コウノトリ野生復帰」に取り組む。人と自然の共生できる地域づくりの拠点でコウノトリをはじめ、豊岡盆地の自然・文化・産業などを紹介。コウノトリを間近に見ながら、コウノトリの野生復帰の取組みなどの解説を聞くことができる。コウノトリと共に暮らせる文化の創造の拠点と位置づけられている。
- コウノトリ本舗・・・コウノトリに関する商品や、地元の特産品を販売。地元産の米を使用したおにぎりや、米粉を使ったパンやケーキなどがある。地産地消などの研修も実施している。

3-2. コウノトリの絶滅と保護の歴史

江戸時代、コウノトリは日本の至るところで見られる鳥だった。しかし、明治に入って、近代化が進み、乱獲の対象となる。当時、コウノトリは稲を荒らす「有害鳥」とみなされていたからだ。そして、木材の大量伐採によって棲む場所を失ったことや、農薬の使用開始と河川改修によってエサとなる生物が減少したことによって、1971年には、日本における野生のコウノトリは完全に消滅した。

1985年にロシアから、個体を導入し、人工繁殖に成功した。以後毎年ヒナが誕生するようになった。「兵庫県立コウノトリの郷公園」、「豊岡市立コウノトリ文化館」が開館するなど、コウノトリが豊岡のシンボルとなる。2005年に試験放鳥され、ついに野生復帰を果たす。現在では、豊岡市を中心に、篠山市や長崎県へも飛来するようになった。

3-3. 具体的な野生復帰政策

- 自然環境の保存・再生・創造
 - 森を多様に活用し、「森」の恵を享受する
 - 多様な「水辺」を再生し、ネットワークして大きな食物連鎖ピラミッドをつくる
 - 休耕田のビオトープ化
 - 「コウノトリ育む農法」によって、おいしいお米とコウノトリの餌となる食べ物を同時に育む
 - 田んぼの様子を見抜き、農業をしながら生きものを育む
- 文化環境の保存・再生・創造
 - コウノトリで豊岡産品のブランド力を高め、付加価値をつけて売る
 - 「コウノトリ」と美しい街並み・農村景観で感動を与えるツーリズムを展開する
 - 自然エネルギーを利用し、楽しみながら省資源型の暮らしを実現する
 - 豊岡の自然・歴史を見つめ直し、学び、遊びながらふるさとを楽しむ

これらによって、コウノトリが悠然と舞う都市を目指している。

第4章 豊岡市の環境学習

4-1. ヒアリング調査

日時	2008年10月20日
ヒアリング先	豊岡市教育委員会・コウノトリ共生課
目的	豊岡市での環境学習の特徴や詳細な実施例について調査する
質問項目	<ul style="list-style-type: none">・ 豊岡市の学校における環境学習の実施状況・ 豊岡市での環境学習を学校、地域はどのように支えているのか・ 豊岡市特有の環境学習プログラムの有無、内容・ 環境学習による教師、生徒への効果・ 豊岡市の環境教育でこれからやりたいこと

ヒアリングの「回答」を次節以詳細にまとめる。

4-2. 豊岡市の取り組み

➤ 調査結果

豊岡市の環境学習は、「ふるさとの自然を見直す」ことや「コウノトリ」をコンセプトとしている。ふるさとの自然とは、オオサンショウウオやホテルを含む、それぞれの地域に合った自然を対象としている。例えば、オオサンショウウオは出石川で息が確認されており、流域に位置する寺坂小学校では、環境学習として、試験放流を実施している。以下に挙げるのが、現在行われている主な取り組みである。

- コウノトリに関する学習・・・コウノトリの郷公園で、コウノトリの観察と湿地の生きものを採集、観察
- 自然体験学習・・・
 - 【水辺】シュノーケル・川の生き物調査・漁業体験・海岸清掃など
 - 【田畑】コウノトリ育む農法についての学習、田植え・稲刈り体験
 - 【里山】林業体験・遊び場づくり
- 自然学校・・・5泊6日の環境学習プログラム
ウォークラリーやシュノーケル体験・登山など

学校での環境学習の取り組みとしては、50:50システムがある。2008年4月から市内の全小中学校で始まった省エネ活動で、電気代を節約し、節減分の半分を市に返還、残りの半分を学校へ還元するシステムである。学校還元分は、子どもたちが希望する物品を購入することで、子どもたちが努力の成果が実感でき、節電への意識を高めることができる制度である。

これらの活動は、「ふるさと実感・環境体験学習」や「生きもの共生の日」事業などによって行われている。「ふるさと実感・体験学習」では、豊岡市が主催し平成18年から実施している事業で、豊岡市ならではの自然・社会体験活動を通して、環境についての意識を高めると共に、ふるさとを愛し郷土意識を持った心豊かなたくましい子どもを育成することを目的とした環境学習プログラムである。このプログラムでは、テーマに沿って事前学習・体験学習（3回）・事後学習という一連の流れを重要視し、豊岡ならではの地域性のある体験学習を行うということで、主に校内での体験学習を対象としている。

「生きもの共生の日」事業とは、平成20年に開始した、豊岡市役所コウノトリ共生課と豊岡市教育委員会の連携事業である。平成19年5月20日に、国内の野外では43年ぶりにコウノトリのヒナが誕生したことを記念して、市が5月20日を「生きもの共生の日」に制定して以来、この日

を中心に『命への共感』をテーマにした啓発事業を行っている。この事業においては、特に統一メニューは用意せず、学校ごとの地域の自然環境を生かした独自の授業を実施することが特徴的である。

4-3. 環境学習の具体例

平成20年度、豊岡市では全30校中18校が環境学習を行っている。そのうち、10校がコウノトリに関連した環境学習を実施している。実際に行われている例を以下に挙げる

表2 豊岡市の環境学習の実施例

学校名	学習内容	考察
城崎 小学校	コウノトリの生息地である湿地の工事を手掛ける建設業者の説明→コウノトリが気持ちよく暮らせるには、どんな環境が必要であるかを考える	実際にコウノトリの野生復帰に携わる人の話を聞くことで、より実践的な学習ができる。また、地域との連携ができており、他地域と異なる豊岡市の特徴を表している。
新田 小学校	佐渡（新潟県）訪問・・・小学校や農業者とワークショップにて意見交換→自然界から姿を消した生きものの野生復帰はどのようにすべきかについて、相互理解	「希少生物の野生復帰に取り組む」という同じテーマを持つ学校同士の連携ができています。情報や学習方法を共有することで、より多角的な学習が可能となる。学校連携は、視野も広げることができるので効果的である。
三江 小学校	コウノトリの郷公園にて、湿地の生きもの、カエル、コウノトリなどを観察→環境について学ぶ	コウノトリ関連施設での校外学習は、コウノトリと近い距離で学習ができるため、子どもたちの関心を引くことができる。また、コウノトリについてより専門的な学習が可能である。
竹野 小学校	磯辺の観察、貝・海草の調理実習 漂着物調査、ゴミ拾い	地域独自の環境を生かした学習ができています。調査や観察、実習など活動は様々であり、漁協など地域との連携や、小中高といった地域内での学校連携も図ることができています。
静修 小学校	「生きもの共生の日」事業で、学校区内にある「道場用水」の水源をたどる「水路探検」を行う→地域の田畑を潤すことで農業を支え、人々の命と生活を支えてきたことを学ぶ	市職員の指導での学習を行っていることから、学校と行政の連携による学習ができています。市もまた、環境学習を進める上で、重要な役割を担っている。また、体験学習から「命を共感」という「生きもの共生の日」事業の趣旨に沿っている。

4-4. 環境学習を支える連携

豊岡市の環境学習の特徴の一つは、地域全体の協力によって成り立っているという点で

ある。国・県・市・地域といったさまざまな機関によって、環境学習が支えられている（図2）。

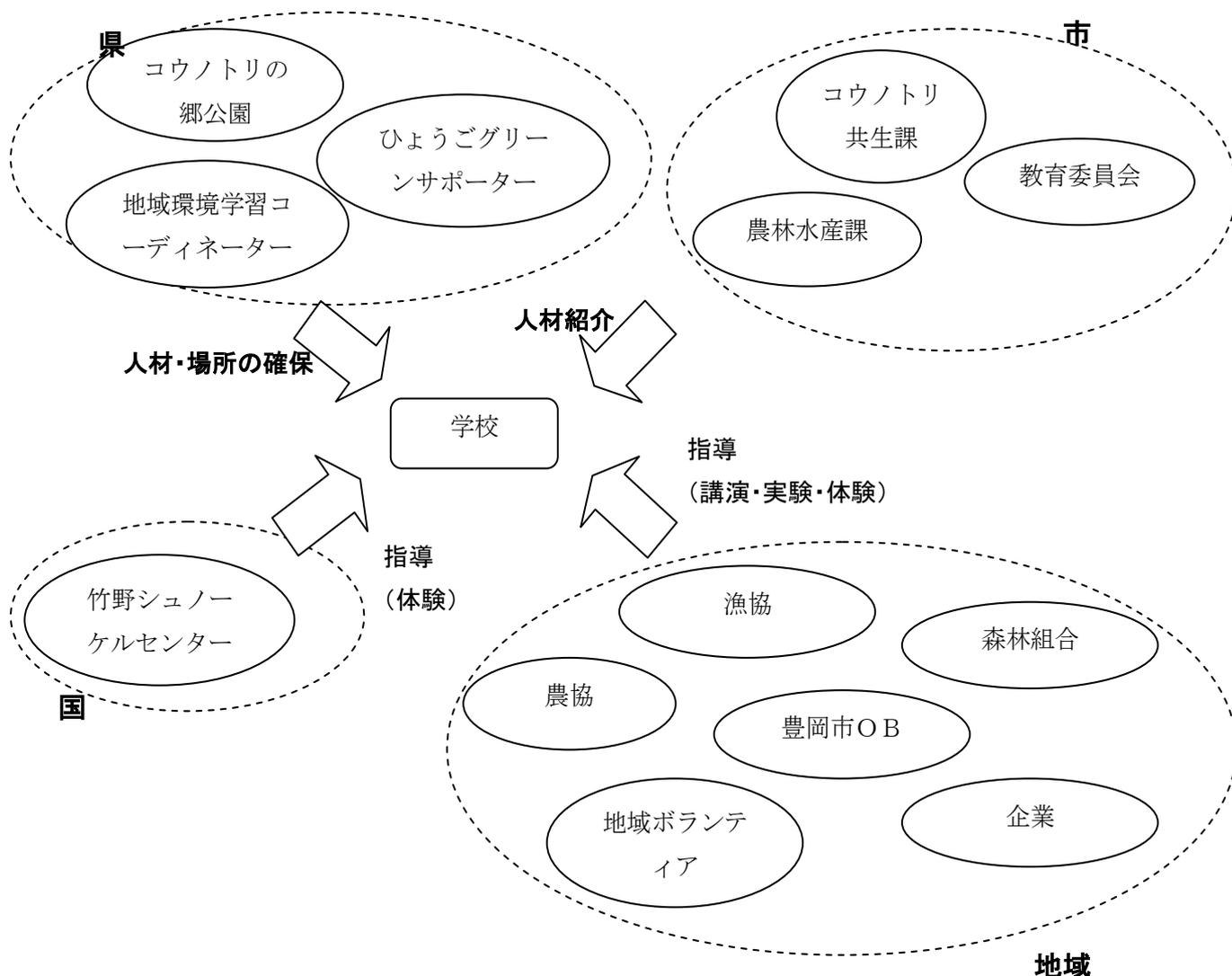


図2 環境学習の連携体制

県や市の役割は、主に環境学習への協力者の紹介や場所の確保である。最も重要項目であるが、具体的な制度はない。一方、国や地域の施設や団体は、実際に指導を行うなど、直接的なサポートをしている。学校に向いての授業や講演、校外学習におけるコウノトリの調査協力など、支援は多岐に渡っている。例えば、地元企業が小中学校において『出前授業』を実施し、太陽光発電実験や地球温暖化に関する講演を行うことで、子どもたちの環境保全に対する意識を養うことに貢献している。

4-5. コウノトリを生かした環境学習の効果と課題

(1) 環境学習の効果

環境学習の効果は、第一に子どもの環境・コウノトリへの意識づけにつながることである。環境学習を受けた生徒の多くが、学習後に「地域のことが見直せた」といった意見を挙げていることから、子どもは、環境学習をする前とした後では、環境への意識が高まることという。また、生徒だけでなく、豊岡のことをあまり知らない若い教師も、環境学習に関わることによって、知らなかったことを知ることができる機会が得られる。つまり、環境学習は、学校全体の、環境への意識を高める役割を果たしている。

第二に、地域の学校で環境学習を実施することで、自然と親や一般市民にも環境学習の存在が知れ渡り、理解が広がることである。そして、環境学習の実施にあたって、サポートする地域住民が学校へ継続的に訪問するようになる。それによって、家庭、一般市民の両方の環境への関心が高まるのである。

第三に、環境学習を依頼する学校と環境学習をサポートする関係機関の相互の連携ができたことである。環境学習を行わない限り関わり得なかった連携体制ができたことで、地域全体の連帯意識にもつながるのである。

しかし、環境学習の効果も多く見られる反面、まだ問題点も多く残っており、十分であるとはいえない。

(2) 環境学習の課題

今回のヒアリング調査から豊岡市で環境学習を充実させるために障壁となる課題が以下の3点に整理できた。

第一に、環境学習に取り組む姿勢が積極的でないことである。支える側の環境学習への意識が低いためと考えられる。旅行業が盛んな城崎地域では、旅行業に従事する地域住民に環境学習のサポートを依頼した場合、承諾してくれる可能性は低い。多忙であるため、環境学習のサポートには手が回らないからだ。そのため、彼らの環境学習への必要意識や優先順位は低い。実際に、城崎小学校では、他地域と比較すると、カリキュラム化される以前は環境学習をあまり実施していなかった。よって、環境学習の受け入れ側の意識には地域や職業によって格差があるとみられ、それが学校での環境学習の実施の頻度や質に影響しているといえる。

第二に、継続性を高めることが課題である。学習カリキュラムに新たに環境学習を取り入れなくてはならないため、組み直すのに手間がかかる。それに加え、今までやっていたことに、さらに環境学習実施のための準備など、教師の負担が増大する。また、環境学習を実施することで、新たな予算が増加する。これらの要因によって、環境学習の継続性には問題が多く、教師の負担や予算が増加しないための仕組みなどが必要だと考えられる。

第三に、環境学習に協力する人材が不足していることである。環境学習には、地域の人材や関係機関と学校との連携が不可欠であるが、サポートをする人材のネットワークや環

環境学習参加に関する登録制度などは整っておらず、継続的に環境学習に参加・支援してもらうのは難しい。そのため、多くの環境学習は、それぞれの学校が募集したボランティアが担っており、その体制は一時的なものであるのが現状である。そのため、環境学習の人材確保への対策はまだ十分でないといえる。

第5章 希少生物の野生復帰を生かした環境学習の展開

5-1. 環境学習によって地域にもたらされる効果とは

環境学習を行うことによって、子どもたちの地域資源に対する意識づけにつながる。豊岡市のような地域の希少生物を生かした学習を行うことは、環境学習を身近なものに感じやすく、地域での生活に生かしていくことができる。また、環境への関心だけでなく、地域への愛着も高めることができる。

環境学習は、本来の目的である子どもたちの教育だけでなく、地域への影響力にもなる。本来、地域の環境を学ぶことが環境学習であるので、子どもだけでなく家庭や一般市民も参加し、地域の環境について理解する権利があるのだ。豊岡市のコウノトリを生かした環境学習は、地域資源を生かした学習を実施しているため、他の希少生物の野生復帰を生かした環境学習を実施していく上で応用することができる。学習するに従って、実際に自分で行動に移すことで、地域の活性化や連携の強化にもつながる。豊岡市のような環境学習は、地域に新たな可能性を生み出すのだ。

5-2. 今後の環境学習

豊岡市の環境学習の例は、他の希少生物の野生復帰を目指している地域における環境学習に生かしていくことができる。地域に根ざした生物と関連した学習を行うという点で、豊岡市と同じだからである。今後、このような地域で環境学習を行うにあたって、留意すべき4点を提案する。特徴は以下のようだ。

- ① 人材面・・・環境学習コーディネーターを置く。学校、環境学習を依頼する役、サポート役の三者による連携体制ができる
- ② 体制面・・・協力者を登録制にして募り、継続性を確保する
- ③ 意識面・・・住民への環境学習を行い、地域全体の環境への意識を上げる
- ④ 内容面・・・社会の現状に合わせた多様な学習を取り入れる

第一に、環境学習をサポートする体制をより強力にするためには、学校と地域の人材・関係機関をつなぐパイプ的な役割を果たす人材を市が確保すべきである。それによって、環境学習を支える地域のネットワークができる。環境学習を実施する学校・人材を集める

人材・協力する人材というように、はっきりと役割を分担し、それぞれの働きに専念する。それによって、それぞれの負担が減り、よりスムーズな連携を可能になる。また、専門的な環境学習を実施することができるのである。

第二に、継続できるような体制やカリキュラムを組むことが重要である。そのためには、まず、環境学習支援ボランティアに登録制度を導入することが考えられる。どういう制度か説明、たとえば今までこうだったものが、制度を導入することでこのようスムーズになる。それによって、ボランティアを募集した時に、地域住民や機関が気軽に参加しやすい。また、実施する側と支援する側が、継続的な関係を持つことができる。

第三に、環境学習に協力する側の理解を得るべきである。地域において、環境学習の必要性が十分に浸透すれば、協力体制がより充実してくると考えられるからである。そのためには、住民のための環境学習を実施するべきだと考える。学校を訪れる機会も増え、環境への意識が高まることで、子どもの環境学習にも協力しようとする意志も得られるだろう。それによって、環境学習に関する地域ネットワークができることだけでなく、教育を受ける生徒だけでなく、地域住民全体の環境への意識も変わってくるはずである。

第四に、多様な環境学習を実施することが必要である。近年、食育が注目され、食育に関する環境学習も多くの学校で行われている。このように、社会の現状に合わせて、環境学習も実施していくべきである。また、地域の環境に合わせた特徴的な学習を行うことが求められる。この点では、豊岡市のコウノトリに関連した学習を参考にすべきである。環境学習の可能性をさまざまに探り、より効果的な環境学習を行っていくことが重要である。そのため、希少生物の生息地域同士の小学校が合同で環境学習を行うことも効果的である。生物や地域環境は異なっても、野生復帰に向けた活動は通じるものがあるため、子どもたちの刺激になり、より実践的な学習が可能となるはずだ。希少生物の野生復帰を目指している地域では、既存の環境学習だけでなく、希少生物を結びつけた新たな環境学習を展開すべきである。

参考文献

- 1) 全国教育研究所連盟(2001)『時代を拓く子どもたちの環境学習』ぎょうせい
- 2) 結城光夫・伊原浩昭(2001)『子どもたちのための環境学習』ぎょうせい
- 3) 川嶋宗継・市川智史・今村光章(2002)『環境教育への招待』ミネルヴァ書房
- 4) 朝岡幸彦(2005)『新しい環境教育の実践』高文堂出版社
- 5) 豊岡市教育委員会(2008)『豊岡市環境教育資料』
- 6) 早渕百合子(2008)『環境教育の波及効果』ナカニシヤ出版
- 7) 本田裕子(2008)『野生復帰されるコウノトリとの共生を考える：「強いられた共生」から「地域のもの」へ』原人舎
- 8) 豊岡市 <http://www.city.toyooka.lg.jp/www/contents/1216099585865/index.html>
(2008.10.3)
- 9) 兵庫県 <http://web.pref.hyogo.jp/ac02/nh0706g.html> (2008.10.3)
- 10) 豊岡市立静修小学校
<http://www2.city.toyooka.hyogo.jp/edu/school/seishu-es/> (2008.10.18)
- 11) 豊岡市立竹野小学校
<http://www2.city.toyooka.hyogo.jp/edu/school/takeno-es/> (2008.10.18)
- 12) 豊岡市立新田小学校 <http://www2.city.toyooka.hyogo.jp/edu/school/nitta-es/>
(2008.10.18)
- 13) 豊岡市立三江小学校 <http://www2.city.toyooka.hyogo.jp/edu/school/mie-es/>
(2008.10.18)